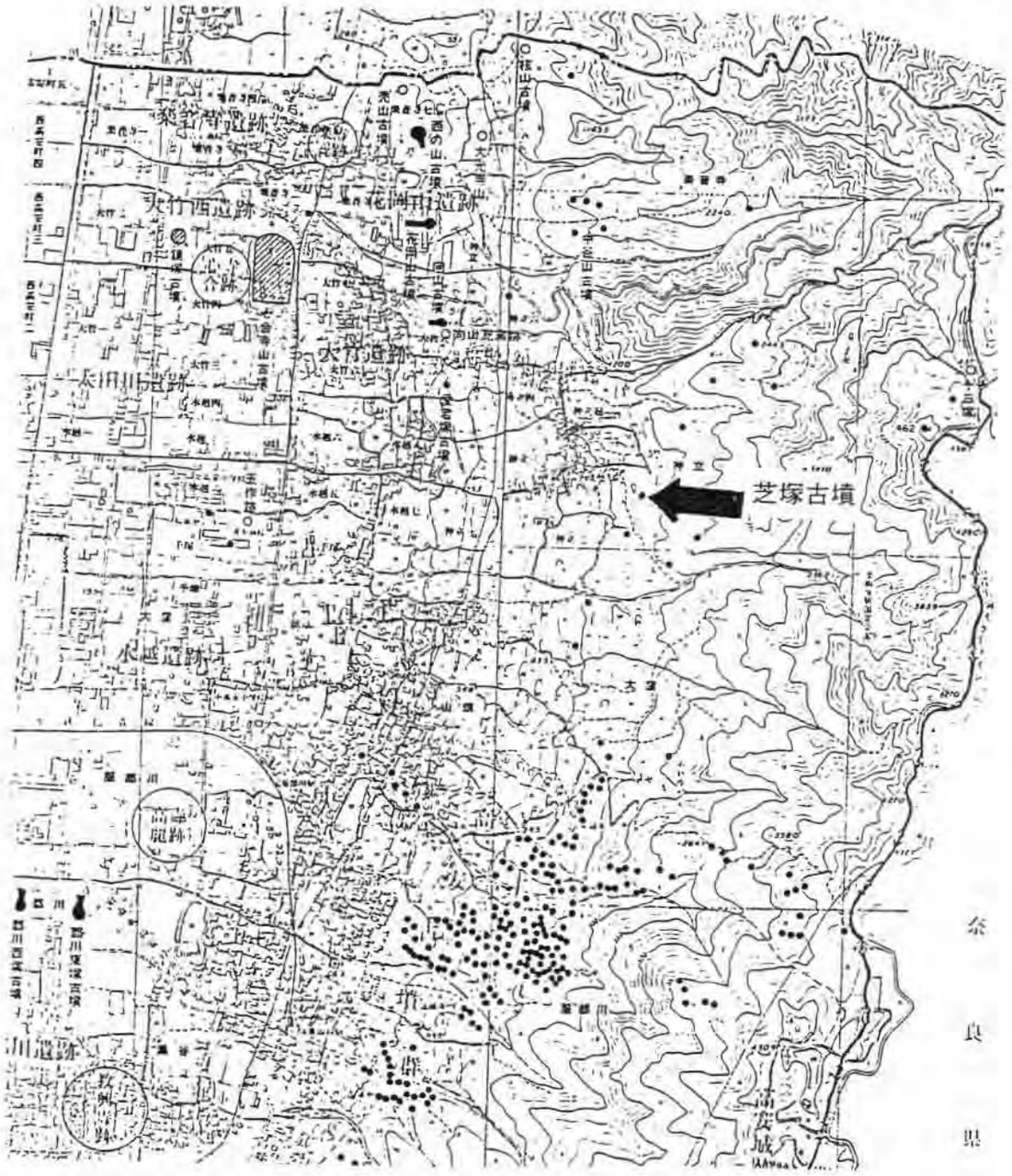
八尾市神立（こうだち）
一芝塚（しばづか）古墳一現地説明会資料

1989年4月8日(土)　午後1時～3時

（財）八尾市文化財調査研究会



周辺遺跡分布図

◆はじめに

今回発掘調査を実施した古墳は、農業用の道路建設に先立つ予備調査（昭和63年5月23日～6月11日）で発見されたもので、小字名が「芝塚」であったことから芝塚古墳と名付けました。予備調査に引き続いて本調査を平成元年2月25日から実施した結果、両袖式の横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳であることが判明しました。

◆芝塚古墳の位置する高安古墳群について

高安古墳群は、八尾市東方の生駒山地西麓（標高 50～450m）全域に分布する古墳時代中期末から終末期にかけての群集墳で、大阪府下で最大の規模があります。昭和48~49年に行なわれた分布調査では、古墳の総数が320基余りと記録されていますが、大正12年に刊行された『中河内郡誌』によると540基が存在したと書かれています。この付近一帯は、古くから石材の採集地と知られており、資料によれば横穴式石室の石材が豊臣秀吉の大阪城の築造に使用されたり、耕地などの開墾で破壊されたりして、古墳の数は減少していったようです。

ほとんどの古墳が、横穴式石室を埋葬施設に持つ円墳で、丘陵上および丘陵斜面に造られています。墳丘の大きさは径10～25m、高さ3～5mのものがほとんどです。横穴式石室の全長は、小さいもので3m、大きいもので10m以上のものがあります。これらの古墳は、5世紀の末に造営が始まり7世紀後半までの約 200年間にわたって造り続けられていたようですが、特に、6世紀の中葉～後葉にかけて集中して造営されていたようです。

◆古墳の立地と調査前の状況

芝塚古墳は八尾市神立2丁目地内に所在し、地形的には生駒西麓の海抜 100m前後の尾根の先端に位置します。予備調査以前の状況は、墳丘の西半分の盛土が削り取られており、西部・北部・墳頂部で石材が露出していました。また、墳頂部付近には柿の木の大木があり、その柿の木の東側を南北方向に里道が通っていました。

芝塚古墳の墳頂に立って西側を眺めますと、眼下には河内平野、北西方向には六甲山地・北摂の山々、南方向には和泉山地が望まれ、天気がよければ遠く淡路島・明石海峡まで見ることができます。

◆古墳の形と大きさ

芝塚古墳は、盛土が後世に削平を受けており全容は不明ですが、埋葬施設の大きさから直径15～20m、高さ5m前後の規模の古墳であったことが推定できます。

◆石室内部の状態

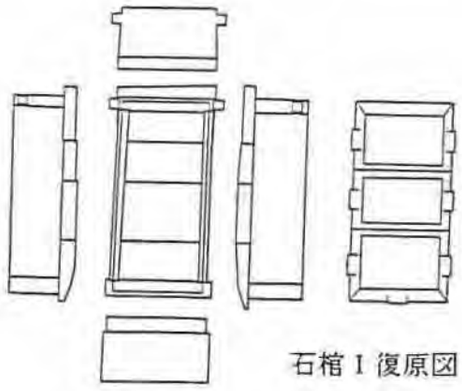
石室は主軸を南北方向に持つもので、南側に開口しています。側壁の石材は西側壁上部が抜きとられていました。天井石についても玄室奥から２石を残して抜き取られていました。また、残っていた天井石も西側にずれており、本来の位置を保っていませんでした。石室内には、多量の小石と土砂が堆積していました。これらを約 1m取り除いたところ、平安時代後期から鎌倉時代前期の土器類が多量に出土しました。さらに、0.2m掘り下げた時点で石棺の蓋の一部がみつかり、周辺を掘り進めた結果、玄室内の奥に１棺（石棺Ⅰ）南側に２棺（西側－石棺Ⅱ・東側－石棺Ⅲ）の組合式家形石棺が石室の主軸と同じ方向に納められていました。

◆石室の規模と石棺

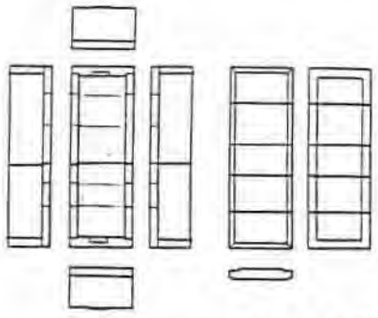
両袖式の横穴式石室で、全長 9.1m を測ります。そのうち玄室は長さ５m、奥壁幅2.1m、玄門幅2.2m、奥壁高2.4mを測ります。玄室に続く羨道は長さ4.1m、羨門幅1.4mを測ります。

石室に使用されている石材は、芝塚古墳の東方で産出する花岡岩が使用されています。石材の積み方は、玄室部・羨道部ともに横積みにされており、玄室部に比較的大ぶりの石材が使用されています。羨道部に散乱している石材は、閉塞石（古墳の入口をふさぐ石）と考えられます。

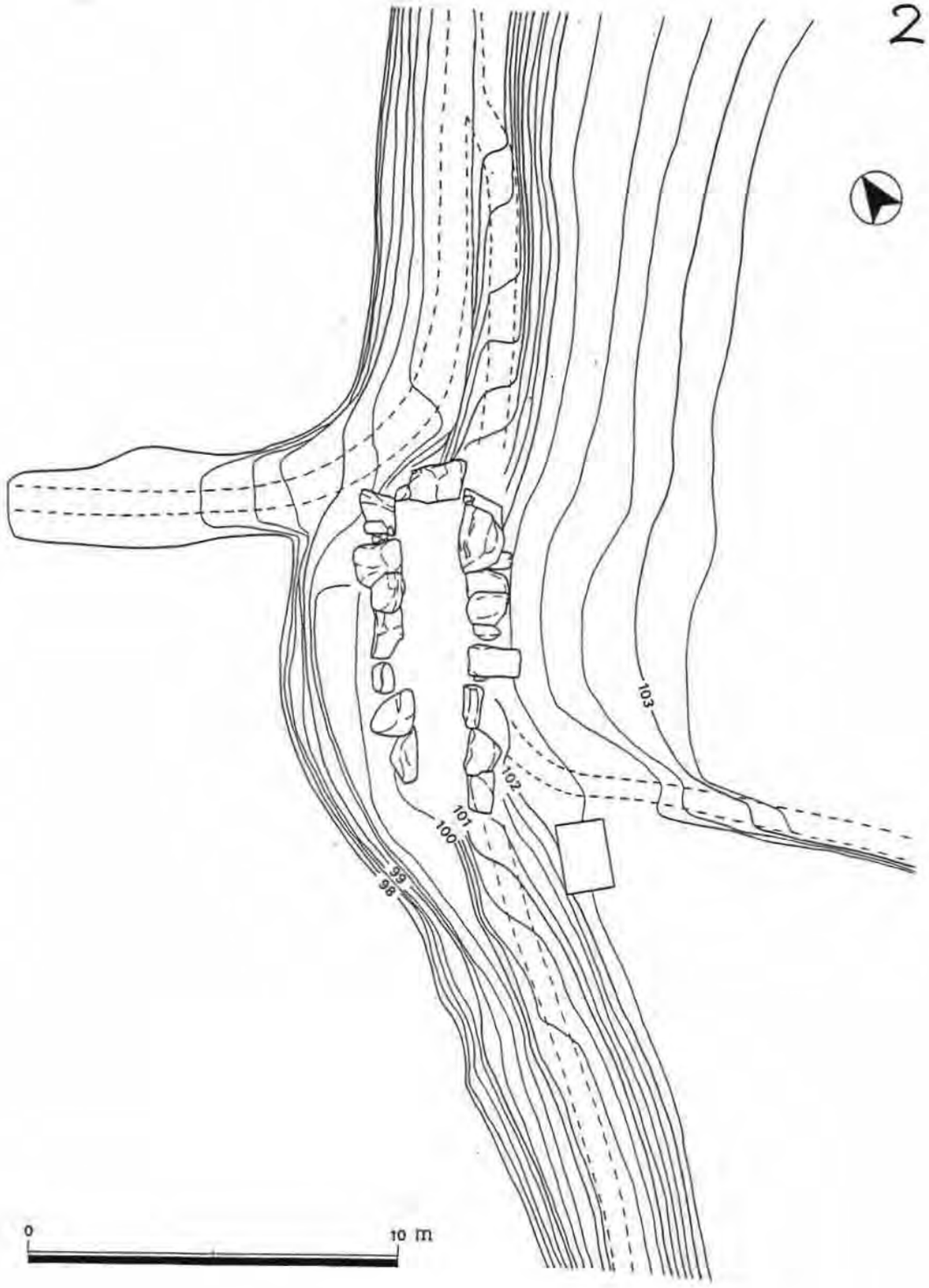
石棺は、玄室の奥の西側壁付近で石棺Ⅰ（長さ２m・幅１～1.1m・高さ0.75m－底板４・側板２・小口板２・蓋板３-縄掛突起７）、西側玄門付近で石棺Ⅱ（長さ1.8m・幅0.8m・高さ0.4m－底板６・側板６・小口板２・蓋板５）さらに石棺Ⅱの東側に並んで石棺Ⅲ（長さ1.8m・幅0.8m・高さ0.6m-底板４・側板４・小口板２・蓋板５）が納められていました。３棺ともに組合式家形石棺で、石材は石棺Ⅰが竜山石、石棺Ⅱ・石棺Ⅲが凝灰岩です。３棺ともにすでに盗掘されており、その時に蓋石は外されたり割られたりしたようで、調査時点では土砂や蓋石の一部が内部に落ちこんで石棺内部全体を埋めていました。



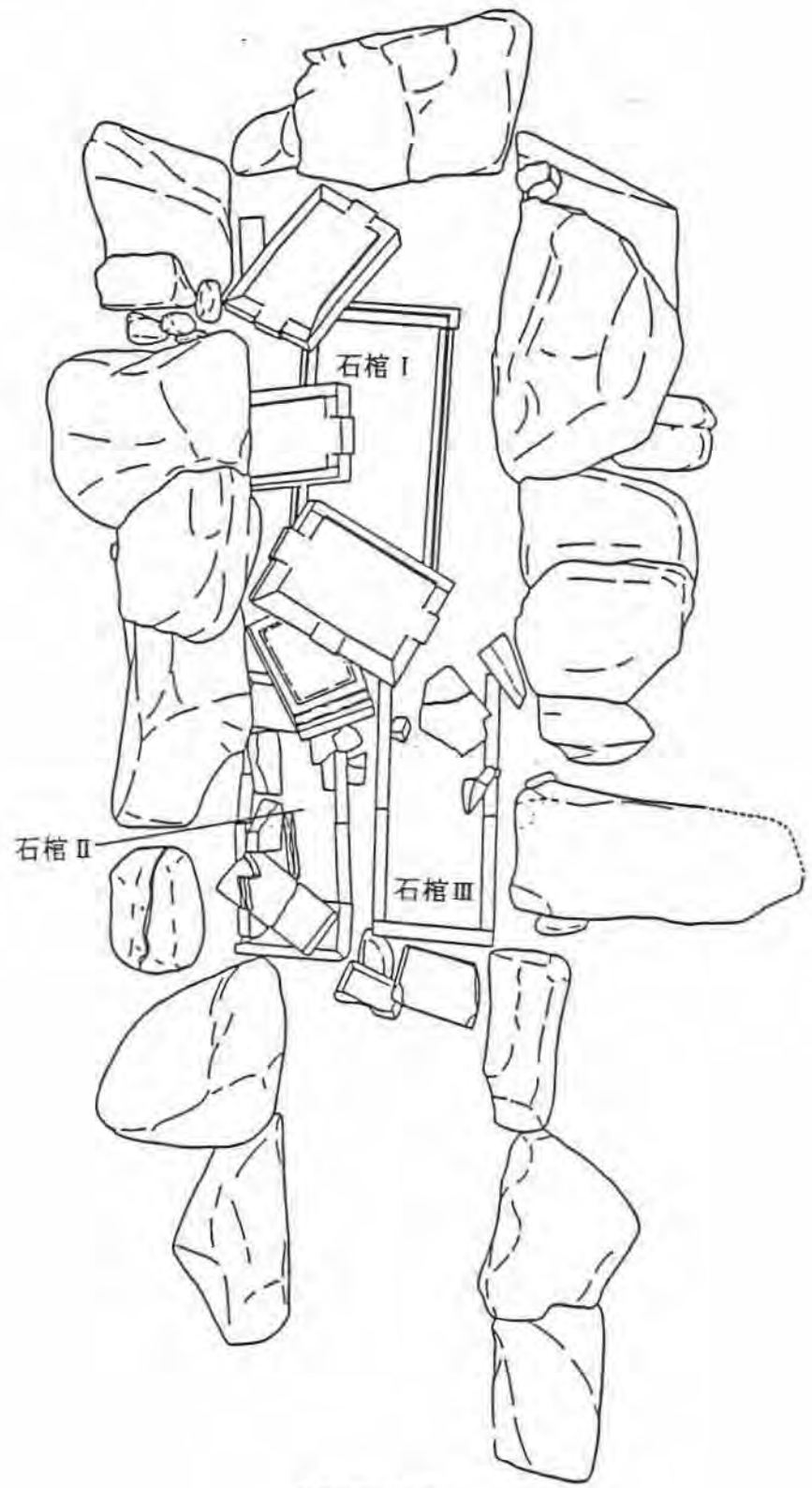
石棺Ⅰ復原図



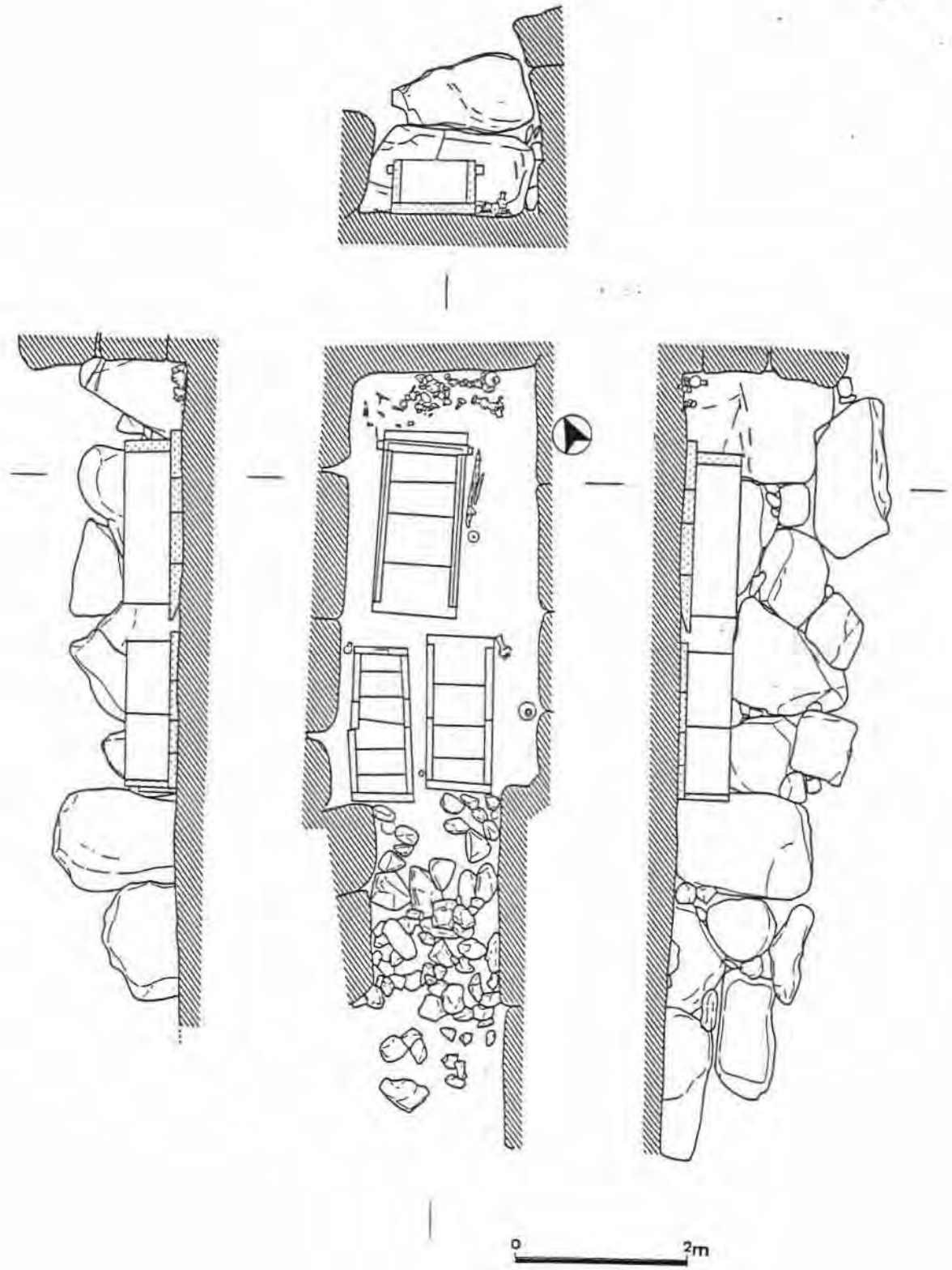
石棺Ⅱ復原図



芝塚古墳外形測量図



石室平面図



◆出土遺物

遺物は、石棺内からは人骨の一部のほか、石棺Ⅰ・石棺Ⅱで鉄製品が各１点、石棺Ⅱで須恵器の器台の破片が２点出土しました。各石棺の周辺からは盗掘をまぬがれた副葬品が最初に据えられた位置に残っていました。副葬品が置かれていた場所は、石棺Ⅰと奥壁の間で土器15点（うち須恵器14点）と馬具（轡具）、石棺Ⅰの東側で直刀２と長頸壺の蓋１点、石棺Ⅱの南側（玄門の西隅）で須恵器の杯蓋１点と鉄製品2 点、石棺Ⅲの南側（玄門の東隅）で須恵器の杯身１点、東側で土器３点（須恵器の台付壺２点・土師器の高杯１点）、石棺Ⅱと石棺Ⅲの間で鉄製品１点が出土しました。また、石室の上部では、平安時代後期から鎌倉時代前期の瓦器椀・瓦器小皿・土師器小皿・土釜・猿投焼四耳壺等が多量に出土しました。

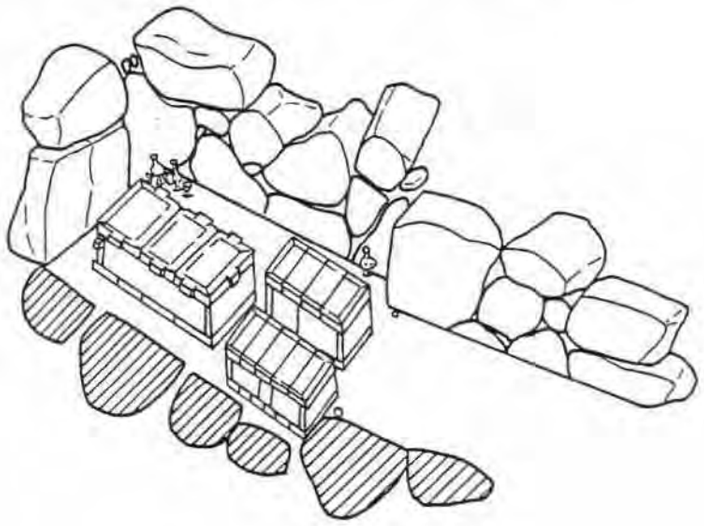
◆調査の成果

１．芝塚古墳は、出土遺物から６世紀後半に造営され７世紀前半に至る間に３人の人を葬った古墳であることが判りました。

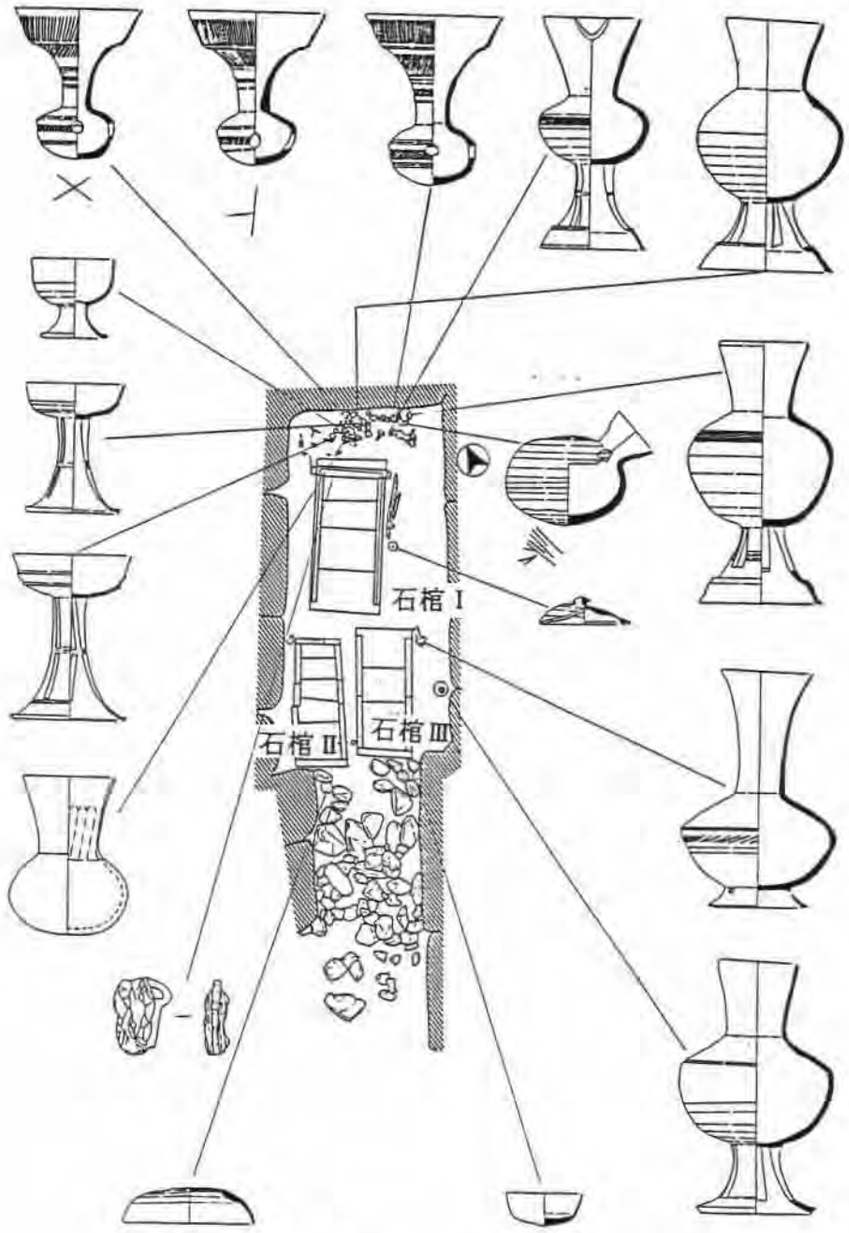
２．３つの石棺は、石棺付近から出土した遺物の特徴から、まず、玄室の奥に石棺Ⅰが６世紀後半ごろ納められ、つづいて石棺Ⅱ→石棺Ⅲの順で追葬されたものと推定できます。

３．石室内に３つの石棺が納められている事例は、近畿地方では奈良県桜井市の狐塚古墳についで２例目です。

４．石棺に使用された石材および産出地は、石棺Ⅰが竜山石（兵庫県高砂市）、石棺Ⅱ・石棺Ⅲが凝灰岩（太子町－二上山牡丹洞付近）です。



石室見取図



石室内出土遺物

横穴式石室の部分の名前